

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 岡本 雅克

本論文は、ドイツ文学史上に独自の位置を占めているハインリヒ・フォン・クライスト (Heinrich von Kleist, 1777-1811) の作品から、いずれもカント哲学との関連がうかがえる2編の小論と1編の短編小説をとりあげて、そこに典型的にあらわれているこの作家の基本的な志向性を明らかにしようとするものである。

クライストは、二十四歳のときに、「カント危機」と称される、ひとつの認識論的な葛藤に陥ったことが、その書簡から推測されている。その原因となったと思われるカントの著作について、これまでさまざまに解釈されてきたが、筆者は、この論文の序章において、『純粹理性批判』の第一版から第二版にかけて「構想力」と「悟性」の関係が変化していることに、クライストが蒙った影響の一端を看取する。「悟性」偏重の啓蒙主義的な自己同一性にたいする批判に、クライストの根本姿勢を認めようとするのである。それに相応して、筆者は、三つの作品において、クライストがカントの用語を引きながらも、しかし、それらをあえて異なる語義においてもちいていることを明らかにする。第一章でとりあげられた小論『話をしながらしだいに思考をつくりあげていくことについて』では、たとえばカントにおいては主観を意味しているはずの「心性 (Gemüt)」が、他者と語りあうことによってひらけてくる「間主観性」の意に変化しているという。また第二章で論じられる小説『チリの地震』では、従前の研究においてすでに確認されていた『判断力批判』との関連において、自己同一的な主観を前提とするカントの「崇高の美学」にたいして、筆者は、地震において露呈される偶然性が、認識する主体の自己同一性を破壊する契機になることを指摘している。小論『マリオネット芝居について』を扱った第三章では、たとえばカントとクライストに共通している「身をおく (sich versetzen)」という動詞をてがかりに、『判断力批判』やシラーの優美論が語るように、主観にもとづく「趣味判断」が通常の意味における「間主観性」を形づくっていくのではなくて、マリオネットの優美さが、もはや「享受」する側の主観に依存しない地点に想定されていることを主張している。

カントにたいするクライストの関係を論じた研究は、筆者も注記しているように、個々の作品に関しては、カッシーラー、コッホ、ハーマツハーをはじめとして、従来からも存在しなかったわけではないが、しかし、これほど総合的かつ徹底的に分析した論文は、ドイツ語圏においても例をみない。

本論文は、細部において、ややもすると強引な論述がみられはするものの、参考文献を博搜しつつ、他方で首尾一貫した論理を構成しえた力量は、十分に評価されるべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士 (文学) の学位に相当するものと判断する。